

広島城跡

西白島（Ⅱ）地点

—広島市中区西白島所在—

2021

公益財団法人広島市文化財団

は し が き

今からおよそ 430 年前に毛利輝元によって築城された広島城は、福島氏、浅野氏と受けつがれ、その城下町も西日本有数の賑いを見せていました。明治時代になると、城地の多くは軍用地として使用され、数多くあった櫓は取り壊され、3 重の堀は外堀から次々と埋められ、現在史跡に指定されている内堀部分だけとなっています。

原爆投下以後、江戸時代の面影をほとんどなくしてしまったこの街に、城郭としての痕跡が非常によく残されていることが明確になったのは、平成の時代の新交通システムの建設計画以後でした。紙屋町から基町にかけて行われた国道 54 号線の中央緑地帯での試掘調査は、道路下に堀跡が埋蔵されていることを私たちに気づかせてくれる端緒となりました。

その後行われた広島城関連遺跡の発掘調査は今回の調査も含めて 20 か所以上になりますが、令和の時代を迎え、ようやく城郭としての輪郭の全貌が明確になり、その中での人々の暮らしぶりも明らかになりつつあると言えるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、この調査にあたり、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、並びに調査に従事していただいた皆様に、熱く御礼申し上げます。

令和 3 年（2021）3 月

公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

例 言

1. 本書は広島市中区西白島町におけるビル建設工事に先立ち、令和2年度に実施した広島城跡西白島（Ⅱ）地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社アサヒホームから委託を受け、公益財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰを若島一則が、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを濱岡大輔（特定非営利活動法人広島文化財センター）が、編集を若島・濱岡が行った。
4. 遺構の実測・写真撮影、木製品を除く遺物の実測・写真撮影、図面の製図は広島文化財センターに委託し、木製品の実測・写真撮影・保存処理は一般財団法人大阪市博物館協会に委託し実施した。
5. 発掘調査に係る基準点の設置は、株式会社四航コンサルタントに委託した。
6. 第1・2・11図は広島市都市整備局都市計画課が発行したものを加筆し、使用している。
7. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図は北西方向が真北、その他は全て方眼北である。
8. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）に拠った。
9. 本書で用いる用語については、『広島城外堀跡西白島交差点地点』（1993年）に準拠する。「外堀（濠）」という呼称は明治期以前の文書には見当たらず、本書においては「搦手の外堀」と便宜的に記述する。
10. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、公益財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	遺構と遺物	6
IV	まとめ	18

挿 図 目 次

第 1 図	広島城跡調査地点分布図	3
第 2 図	調査区位置図	5
第 3 図	調査区内遺構配置図	5
第 4 図	石垣平面図・立面図（折り込み）	7
第 5 図	矢穴のある石材平面図・立面図	9
第 6 図	石垣・堀土層断面図	10
第 7 図	出土遺物実測図①	12
第 8 図	出土遺物実測図②	14
第 9 図	出土遺物実測図③	16
第 10 図	出土遺物実測図④	17
第 11 図	北堀推定位置図	19
第 12 図	石垣土層断面比較図	20

付 表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表（磁器）	11
第 2 表	出土遺物観察表（陶器・瓦質土器・土師質土器）	13
第 3 表	出土遺物観察表（平瓦）	13
第 4 表	出土遺物観察表（丸瓦）	15
第 5 表	出土遺物観察表（石製品）	15
第 6 表	出土遺物観察表（金属製品）	15
第 7 表	出土遺物観察表（木製品）	15

図 版 目 次

- 図版 1 a 調査区全景（航空写真・南から）
 b 調査区全景（航空写真・北東から）
- 図版 2 a 石垣（南東から）
 b 堀埋土土層断面（南西から）
- 図版 3 a 石垣（西から）
 b 石垣（東から）
 c 石垣栗石除去後（西から）
 d 石垣栗石除去後（東から）
- 図版 4 a A 地点土層断面（西から）
 b B 地点土層断面（西から）
 c C 地点土層断面（西から）
 d 裏込内石臼出土状況（北東から）
 e 矢穴のある加工石材（北から）
 f 曲物出土状況（東から）
 g 蓋出土状況（南東から）
 h 枡出土状況（南西から）
- 図版 5 出土遺物（1）
- 図版 6 出土遺物（2）
- 図版 7 出土遺物（3）
- 図版 8 出土遺物（4）
- 図版 9 出土遺物（5）

I はじめに

広島市教育委員会（広島市市民局文化スポーツ部文化振興課文化財担当が補助執行）は、令和元年6月28日に株式会社アサヒホーム（以下「アサヒホーム」とする）から、同社が販売を予定している広島市中区西白島町18－4、18－22における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会を受けた。広島市文化振興課はこれを受けて、同年7月17日から7月23日の間の3日間に事業地内の試掘調査を行った結果、広島城跡に関連する石垣等の遺構が存在することを確認し、同年7月31日にその旨をアサヒホームに回答した。以後、この遺跡の取り扱いについて両者は協議を重ねたが、計画の変更は困難であり、記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで、アサヒホームは令和元年8月22日に、公益財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」とする）に発掘調査の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課（以下「文化財課」とする）では、現地調査を令和2年1月6日から同年1月31日まで実施した。整理作業及び報告書作成は、文化財課が令和2年4月から令和3年3月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者	株式会社アサヒホーム
調査主体	公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課
調査関係者	円奈勝治 理事長（令和元年度） 北吉孝行 理事長（令和2年度） 田原範朗 常務理事 福永 治 常務理事 山地正宏 常務理事 大森 寛 常務理事 江崎一博 文化科学部長 菊楽 肇 文化財課長 高下洋一 課長補佐
調査担当者	若島一則 指導主事
調査補助員	植田敏則 大嶋忠久 加藤恒子 川本博久 熊谷公德 古寺正次 五石喜満 高野茂樹 寺田 誠 原みゆき 宮地美穂 守岡宏明

なお、株式会社アサヒホーム、市民局文化スポーツ部文化振興課、地元の住民の方々には調査を円滑に進めるに当たって多大な御配慮と御協力をいただいた。また、調査にあたり小都隆氏から貴重なご指導、ご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

本遺跡は広島市中区西白島町に所在する広島城関連遺跡である。史跡広島城跡天守閣から北東へ約 350 m、白島小学校の北側に位置している。

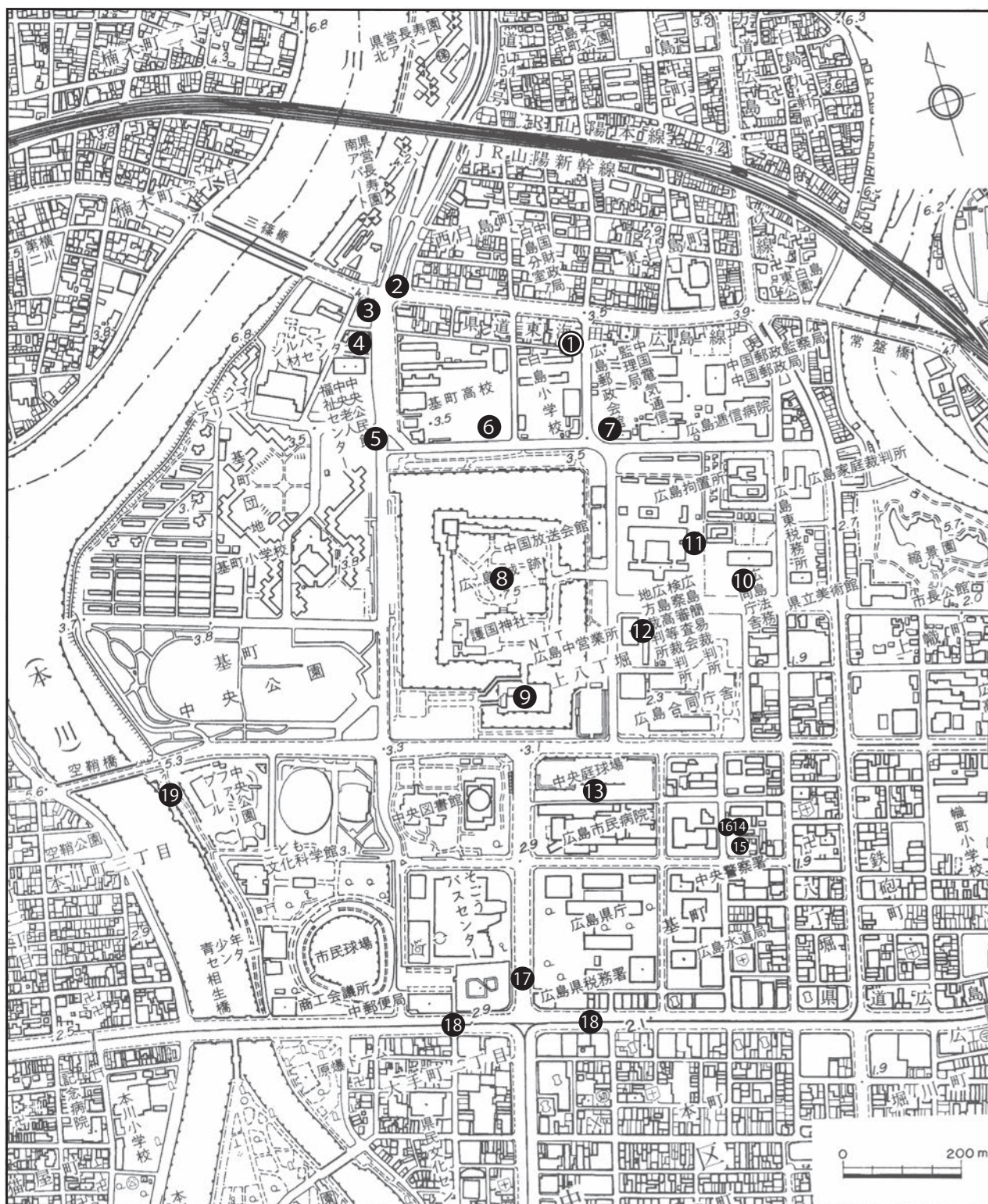
広島城は太田川によって形成された三角州の中で太田川（本川）と京橋川の分流地点（一本木）を北端とし、西に太田川、東に京橋川に挟まれた紡錘状を呈した島状地を利用して築城された平城である。近年の発掘調査により築城前と考えられる遺構面から、耕作に伴うと考えられる素掘溝が検出されており、築城前に島状地が活用されていたという指摘¹⁾がある。「知新集」によれば、「箱島ハ、白島ノ古名にして、広島の土地往古海中なりし時も、此のあたりのミは神代よりの一山箱の如く方なりける故」とあり、本調査区の地名の白島はこれに由来している。

毛利輝元により天正 17 年（1589）から築城され、関ヶ原の戦い以後、慶長 6 年（1601）広島へ転封された福島正則により大規模に改修されたと考えられている。福島正則が元和 5 年（1619）に改易になった後に浅野長晟が紀州から転封され、明治を迎えるまで浅野氏が在城する。明治 4 年（1871）の廃藩置県後、本丸に鎮西鎮台第一分営が置かれた後は次第に政治的中枢としての機能を失い、広大な城域内の建物群や堀・石垣・土塁等は随時撤去され、市街地へと改変されていった。

広島城は広島藩が正保元年（1644）に幕府へ提出した『安芸国広島城所絵図』（以下『正保絵図』）が、平面構成を最も正確に表現しているとされており、近世を通じて大きく変化していないとみられる。広島城は縦長の長方形の本丸の南側に土橋を経由して横長の長方形の二の丸が接続した中枢部の外周を内堀で囲んでいる。内堀の西・南・東側には凹字形の三の丸が接し外周に中堀が巡っている。本丸・三の丸の北側には凹字状の外郭（北の郭）²⁾があり、東端・西端が中堀と接する M 字状の外堀（「搦手の外堀」³⁾）が巡っており、本調査区はこの「搦手の外堀」の北岸にあたる。

絵図から当該地点の周辺の変遷を見ると毛利氏時代の様相を描いたものとされる『芸州広島城町割之図』では、「北の郭」自体が存在せず、「搦手の外堀」推定地は太田川と京橋川を東西方向につながる自然流路（城北川）となっている。『知新集』に収められている『毛利氏時代城郭内の図』でも自然の川のままであり、また城郭側の川岸は「ツゝミ（堤）竹藪」となっていて川沿いに櫓等の施設が設けられていた様子はない。続く福島氏の時代には、前述したように城郭の大規模な改修が行われたとされるが、具体的な工事箇所や内容については明らかではない。浅野氏入封後あまり時期を経ていない段階の状況と考えられる『寛永年間広島城下図』では、「北の郭」及び「搦手の外堀」が既に構築されており、堀際の櫓や塀等も完備して城郭としての構えが十分に整っている。慶長 20 年（1615）に武家諸法度が出されて以降、浅野期において城郭の機能を左右するような改修は行われていないと考えられるため、福島期に城郭の整備が進められたと捉えられている。

明治以降の図面としては、明治 10 年（1877）に陸軍測量部が作成した実測図の写し「広島城之図」がある。図面の精度は高く、「搦手の外堀」が埋め立てられる前の姿を忠実に表していると評価される。その後、明治 39 年（1906）に広島市議会へ「城堀築堤下渡請願案」が提出され、この中に「搦手の外堀」に相当すると考えられる「白島筋約二万二千四百坪」との記載があり、明治 45 年（1912）に市議会において堀の埋立地の処分が議決されており、この時期前後に埋め立



1. 本地点 2. 城北駅北(旧西白島)交差点地点〔外堀跡〕 3. 城北駅北(旧西白島)交差点地点〔櫓跡〕
 4. 西白島地点 5. 基町高校前交差点地点 6. 基町高校グラウンド地点 7. 国保会館地点 8. 史跡広島城跡本丸
 9. 史跡広島城跡二の丸 10. 法務総合庁舎地点 11. 裁判所地点 12. 司法書士会館新築地点 13. 中央庭球場地点
 14. 八丁堀地点 15. 太田川河川事務所地点 16. 広島ビジネスタワー地点 17. 県庁前地点 18. 紙屋町・大手町地点
 19. 外郭櫓台地点

第1図 広島城跡調査地点分布図 (S=1/10,000)

てられたと考えられる。

「搦手の外堀」は 1991 ～ 1995 年、2004 年に西白島交差点付近で発掘調査が実施されており、「搦手の外堀」に伴う北岸石垣列、城郭北西隅櫓台石垣が確認され、「搦手の外堀」の北西部分については正確に位置が把握されたが、外堀の南側の位置はまだ特定されておらず、現時点で堀の幅は未確定である。

註

- 1) 上八丁堀地点・法務総合庁舎地点で検出された素掘り溝は畑跡で、広島城築城以前は微高地で耕地であった可能性が高いという指摘がある（後藤 2013）。
- 2) 本丸の北側に位置する郭については、1991・92 年度に行われた広島城外堀跡西白島交差点地点の発掘調査報告書において便宜的につけられた「北の郭」の呼称を引き続き用いる。
- 3) 「北の郭」の外周を巡る堀には、1991・92 年度に行われた広島城外堀跡西白島交差点地点の発掘調査報告書において「搦手の外堀」の仮称がつけられた。一方広島城の北から西側にかけては、「搦手の外堀」の北西屈曲点から「四角堀」を経て太田川の流路そのものが外堀とみなされている。『知新集』では「白島の御堀」と記されている。

参考・引用文献

【広島城に関する報告書】

桑田俊明 1980 『広島城外郭櫓跡発掘調査概報』

多森正晴編 1992 『広島城中堀跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 5 集

高下洋一 1992 『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 6 集

多森正晴編 1993 『広島市中区西白島所在 広島城外堀跡西白島交差点地点』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 9 集

福原茂樹 1994 『広島市中区基町 11 番所在 広島城県庁前地点発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 12 集

大室謙二編 1995 『広島市中区西白島町外所在 広島城関連遺跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 15 集

篠原達也編 1997 『広島市中区西白島町所在 広島城外堀跡城北駅北交差点地点発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 18 集

篠原達也編 1999 『広島城外堀跡紙屋町・大手町地点—広島市中区紙屋町・大手町所在—』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 1 集

福原茂樹 1999 『広島城遺跡基町高校グラウンド地点』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 3 集

福原茂樹編 2004 『史跡広島城跡本丸遺構保存状況調査報告』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 10 集

稲垣恒宏 2005 『広島城遺跡西白島地点—広島市中区西白島町所在—』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 12 集

福原茂樹 2006 『広島城跡太田川河川事務所地点—広島市中区八丁堀所在—』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 15 集

脇坂光彦・田部秀男・小柳太一編 2007 『広島城跡司法書士会館新築地点発掘調査報告書』

川田秀治 2007 『広島城跡国保会館地点—広島市中区東白島町所在—』

松田雅之編 2009 『広島城跡法務総合庁舎地点—広島市中区上八丁堀所在—』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 16 集

若島一則編 2009 『広島城跡裁判所地点発掘調査報告書』

小柳太一編 2010 『広島城跡八丁堀地点発掘調査報告書』

株式会社パスコ編 2010 『広島城跡上八丁堀地点—広島合同 5 号館埋蔵文化財調査にかかる発掘調査報告書』

池本和弘編 2016 『広島城跡広島ビジネスタワー地点—広島市中区八丁堀所在—』公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 2 集

【報告書以外】

後藤健一 2013 「広島城築城の「島普請」説」について『芸備』第 42 集 芸備友の会

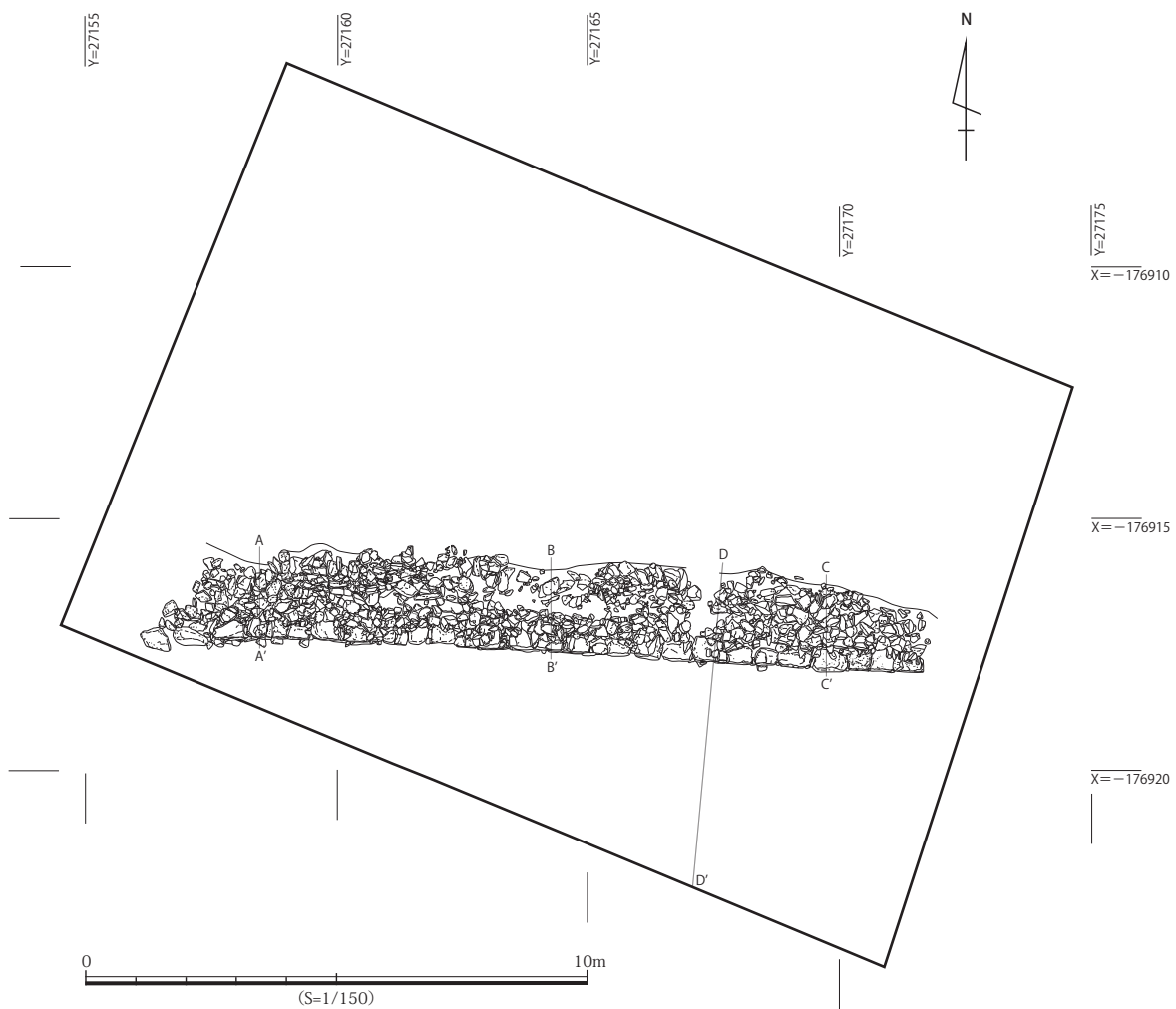
広島市役所 1962 『新修広島市史』第 5 巻

広島市立中央図書館編 1990 『広島城下町絵図集成』

「広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）」広島市立中央図書館貴重資料アーカイブ (<https://trc-adeac.trc.co.jp/>)



第2図 調査区位置図 (S=1/1,500)



第3図 調査区内遺構配置図 (S=1/150)

Ⅲ 遺構と遺物

1 調査の概要

本発掘調査は、ビル建設工事に伴うものである。調査の実施にあたり、広島市文化振興課が令和元年7月に行った試掘調査の成果に基づき、調査範囲を決定した。調査面積は208 m²である。調査対象となる遺構は絵図や測量図との検証により、「搦手の外堀」の北側にあたる石垣であると推定された。

発掘調査に先立ち、調査区の周囲には土留め用の鋼矢板を打設し、地表面から住宅に伴う攪乱層の約1～1.2 mほどを重機掘削により除去した。重機掘削後、調査区の南側で石垣の裏込石を検出したが、それより北側には遺構は確認できなかったため、石垣列と堀の検出を重点におき調査を実施した。

石垣は鋼矢板で囲んだ調査区の南側にほぼ東西方向の向きで位置し、遺物は堀や石垣裏込から多く出土した。堀から出土した遺物には陶磁器・石製品・金属製品（銅銭など）・木製品といった様々な種類のものが出土したが、堀は明治45年（1912）前後に埋め立てられており、遺物の時期は江戸初期から明治末までと幅広い。今回の調査では石垣裏込からも多くの遺物が出土したため、石垣の構築時期を検討する意味でも、堀内から出土した遺物（金属製品・木製品を除く）に関しては割愛する。

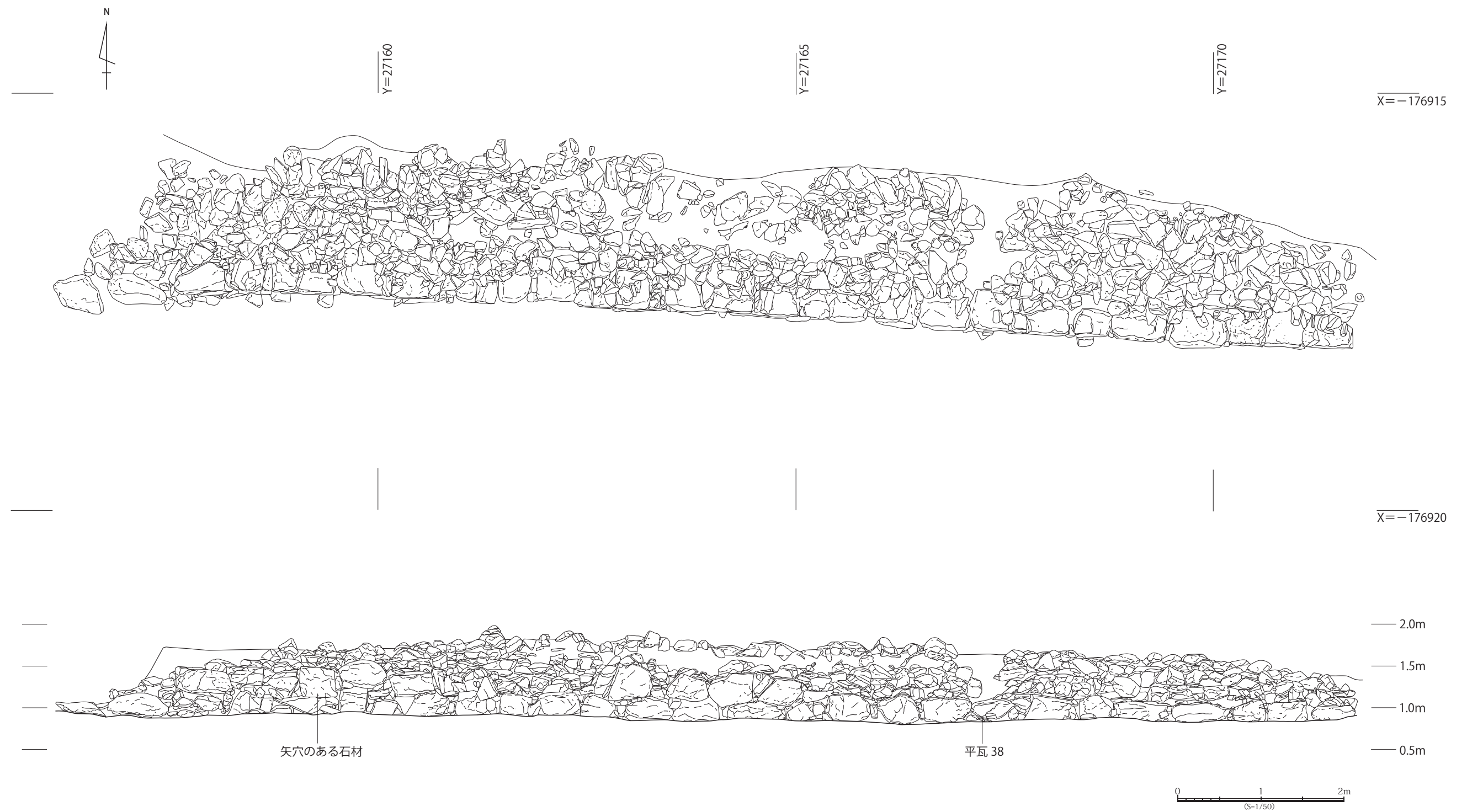
2 遺構

石垣

調査区の南側、道路面（標高3.03 m）から約1.2 m下で東西方向に延びる石垣の裏込め石を検出した。調査区地表面から検出面までは建物の解体に伴う攪乱を受けており、石垣より北側部分では遺構は確認できなかった。

検出した石垣は東西長約15.6 m、高さ0.6 m、掘り方部分を含めると幅1.7 mを測る。西北西から東南東へ2～3°程度振りが認められるが、ほぼ東西方向に向いている。現状では1～2段までしか残存しておらず、石垣の西端の2石は矢板工事により原位置から動いた状態であった。石垣の勾配は2段以上残存しているA地点で86°、B地点で85°で、ほぼ垂直に近い角度で積まれている。1995年調査（西に約300 mの地点）で検出された石垣の高さが約3.4 mで、根石からの勾配は約83°であるから、ほぼ同様の勾配の石垣であったといえる。

石垣に用いられている石材は、長さ50～60 cm、幅40～50 cm、高さ20～30 cmで花崗岩が主体で、自然石と粗割石材が主に用いられており、矢穴を伴う加工石材は1石のみ確認できた。積み方は、根石（基底石）としてやや大きめの石を長辺を正面に据え横積みになっている箇所が多くあり、各石材の隙間が大きく認められ、その隙間を埋めるように間詰石が入られている。2段目に積まれた石材も根石とほぼ同じような大きさの石材が用いられている。根石の高さもほぼ同じような高さの石材が選ばれ、2段目に積まれた石材も同様の大きさであることから、横方向に目地を通

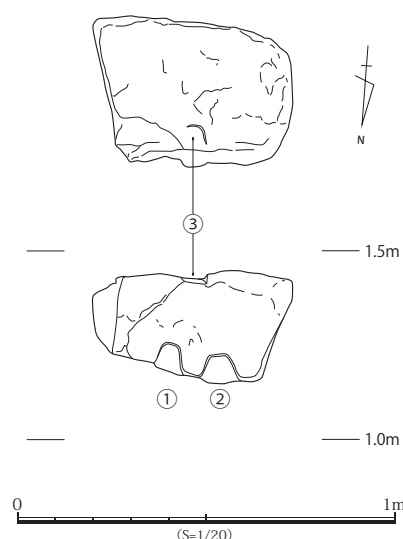


第4図 石垣平面図・立面図 (S=1/50)

すことを意識している、いわゆる「打込接布積み」の石垣である。

石積みの裏には、20～30 cm大の栗石が大量に裏込掘り方内に充填されている。栗石の多くは石垣の石材と同じ花崗岩であるが、わずかながら流紋岩の川原石も認められた。また、裏込内には石垣構築の際に混入したと考えられる陶磁器・瓦・土師質土器・石臼・銅銭が出土した。

石垣の西から6石目（2段目）の石材は上辺幅44 cm、下辺幅38 cm、高さ30 cmのやや横長の石材で、背面（裏込め側）に2か所（①・②）、上面に1か所（③）で矢穴跡が認められた。矢穴の形状は逆台形で、①は上面幅8 cm、奥行7 cm、②は上面幅10 cm、奥行8 cmで、矢穴間隔は5 cmである。③は上面幅約7 cm、奥行6.5 cmである。



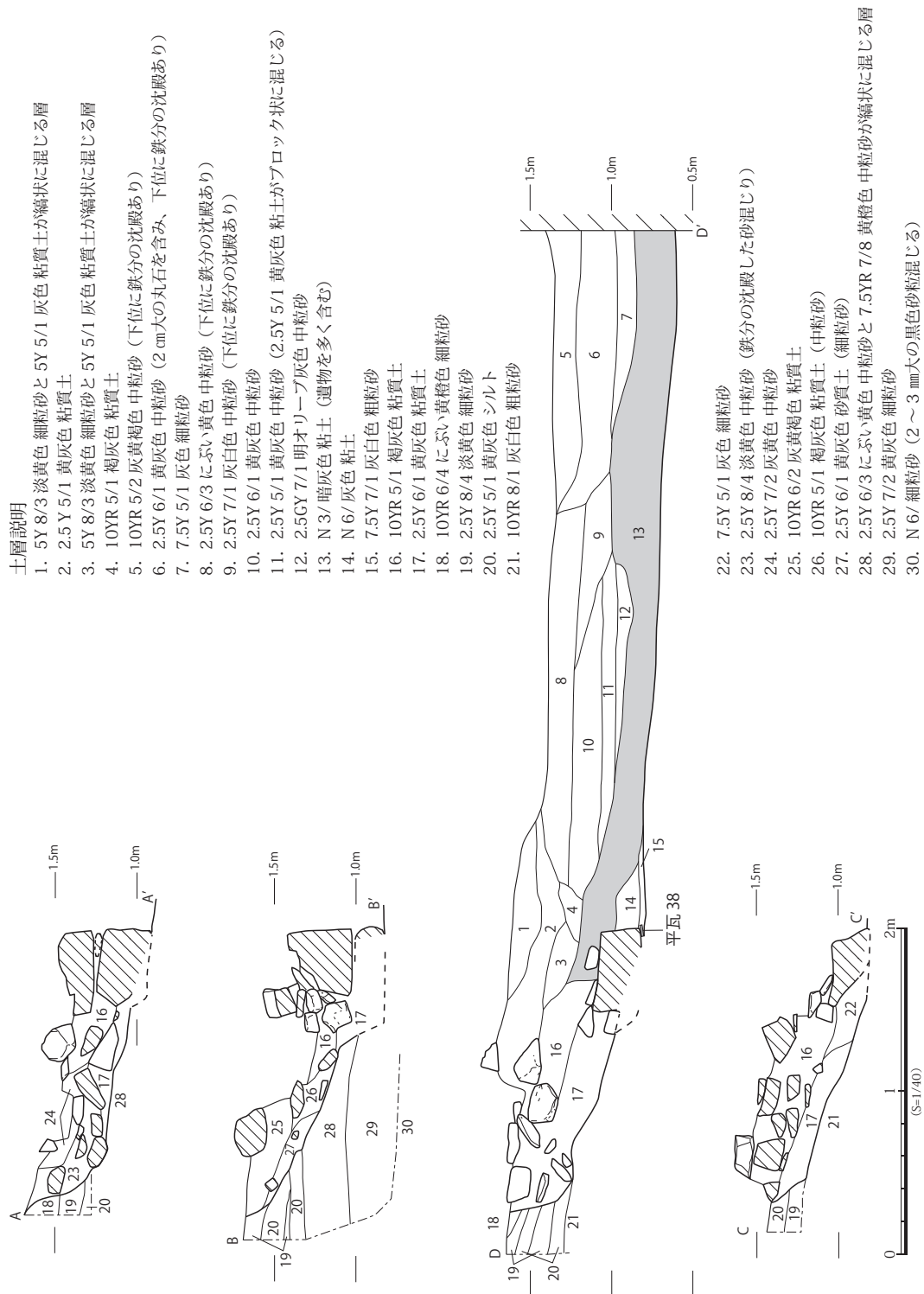
第5図 矢穴のある石材平面図・立面図（S=1/20）

石垣は自然堆積層（シルトと細砂の互層の無遺物層）を幅1.7 m、深さ0.8 m（検出面から根石下まで）を掘り込み、砂層の上面に直接根石が据えられている。根石下には胴木や土留めなどの工法が用いられた形跡は認められなかったが、平瓦（38）を根石下に置かれている箇所が認められた。土層断面から根石は砂層上で安定しており、石垣の自重により沈下した形跡もない状況から、石垣自体は他の地点（交差点地点）ほど高くなかった可能性が考えられる。

堀

広島城の搦手（裏側）で城内外を区画する外堀に相当する「搦手の外堀」の北東部にあたる。この堀の南側が本丸の北側に位置する「外郭」で、北側が城外の「侍町」となる。前述の石垣は侍町側の石垣である。

本調査区内の堀の最深部は石垣から約4 m南の地点で0.6 mで、地表面から2.4 mの深さとなる。石垣より南へ4 mの箇所で根石下面より20 cm下がる。堀の幅・深さは「正保絵図」によると「廣十八間 深九尺」（1間＝6尺5寸として幅約35.4 m 深さ約2.7 m）とあり、堀の中央部分は更に深くなると考えられる。石垣近くの堀底は灰白色の粗粒砂で、その上には30 cmほどの有機物を含んだ暗灰色粘土が堆積しており、ここから木製品（下駄・蓋・曲物・枡・駒）や石臼、大量の陶磁器や瓦などの土器など多くの遺物が出土した。



第6図 石垣・堀土層断面図 (S=1/40)

3 出土遺物

石垣裏込内から栗石と共に陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・銅銭が出土し、堀内から多量の陶磁器と金属製品・木製品が出土した。堀内から出土した遺物に関しては、保存処理の必要な遺物（金属製品と木製品）のみを取り上げる。

磁器（第7図1～13）は主に肥前系の染付が中心で、碗・皿・猪口の器種がある。生産年代は碗が17世紀前半～18世紀中頃、皿が17世紀中頃～18世紀中頃と考えられる。陶器（第7図14～20、第8図21～25・27～31）は肥前系と備前のものがあり、碗・皿・猪口・片口鉢・搦鉢・火入・灯明皿・壺・甕と様々な器種がある。生産年代は碗や猪口が17世紀前半～18世紀後半、皿は16世紀後半～17世紀末、片口鉢が18世紀後半で磁器よりやや古いものが含まれる。

中心飾りが三つ巴文の軒平瓦（第8図35）は、広島城内では太田川河川事務所地点SK94出土瓦に次ぐ2例目の出土である。軒平瓦（第8図36）は中心飾りが二葉文と推定され、八丁堀地点出土例とは均等唐草文の向きと数が異なる新しい例である。

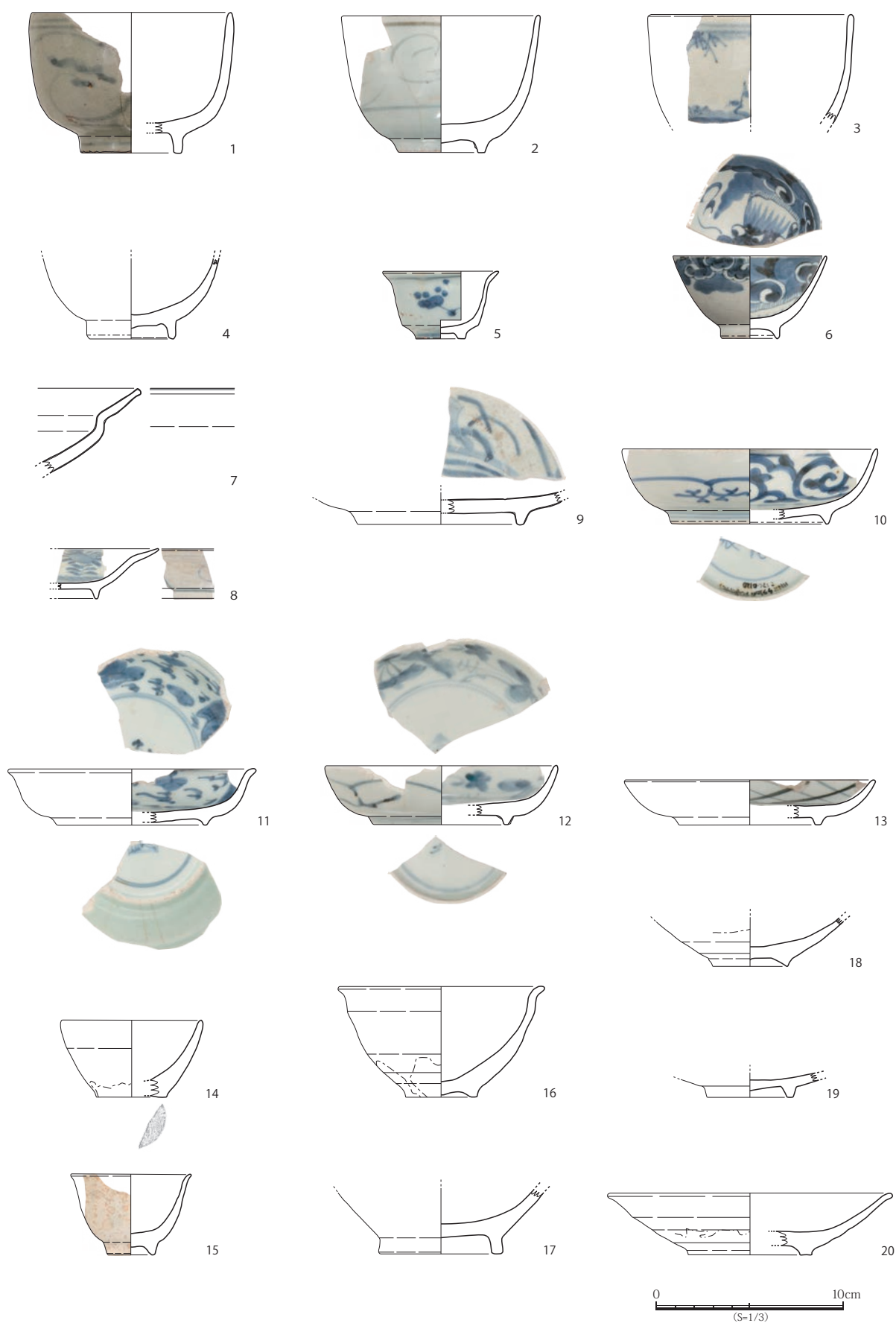
磁器皿（第7図9）・平瓦（第9図39・40）は、二次被熱により器表面が泡立ち荒れた状態となっており、火災などの影響を受けたものと考えられる。

寛永通寶（第9図46～51）の内、50のみ「寶」の字の下が「ハ」となる寛文8年（1668）以降に鑄造された「新寛永」である。

第1表 出土遺物観察表(磁器)

(単位はcm []は残存値)

番号	出土位置	種別	口径	器高	底径	特徴
1	裏込石下	磁器 染付碗	10.6	7.5	5.4	外面に菊唐草文と圏線、畳付きのみ露胎。肥前系
2	裏込内	磁器 染付碗	10.6	7.3	4.6	外面に菊唐草文と圏線、畳付きのみ露胎し離れ砂付着。肥前系
3	裏込石下	磁器 染付碗	11.0	[5.8]		外面に風景画と二重の圏線。肥前系
4	裏込内	磁器 白磁碗		[4.3]	4.4	内面は透明釉、外面は白土（白い泥漿）。畳付きのみ露胎。肥前系
5	裏込内	磁器 染付猪口	6.2	3.6	2.6	外面に退化した梅文・圏線。畳付きから外面見込みは露胎。肥前系
6	裏込石下	磁器 染付小碗	8.2	4.4	3.0	外面に雲文、内面見込みに龍文、畳付きのみ露胎。肥前系
7	裏込石下	磁器 青磁皿		[4.5]		内外面に青磁釉、口縁上面に口錆。肥前系
8	裏込内	磁器 染付皿		2.65		内面に草花文、外面に圏線。畳付きのみ露胎し離れ砂付着。肥前系
9	裏込内	磁器 染付皿		[1.8]	8.8	見込みに山水文、畳付きは露胎し離れ砂付着。二次的な被熱により表面の釉が泡立つ。肥前系
10	裏込石下	磁器 染付皿	13.6	4.0	8.4	外面に唐草文、内面に唐草文と圏線、底面に「成」「製」の文字と圏線、畳付きのみ露胎。肥前系
11	裏込内	磁器 染付皿	13.2	3.0	8.0	内面に鳥文・雲文・圏線、内面見込みに五弁花文。外面は青磁、外面見込みに角渦福・圏線。畳付きのみ露胎。肥前系
12	裏込内	磁器 染付皿	12.4	3.15	7.2	内面に扇文・植物文・圏線、内面見込みに五弁花文、外面は唐草文・圏線。畳付きのみ露胎。内面見込みに三足付ハマの支え跡あり。肥前系
13	裏込内	磁器 染付皿	13.4	2.4	7.6	内面に斜格子文、見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付きのみ露胎。肥前系



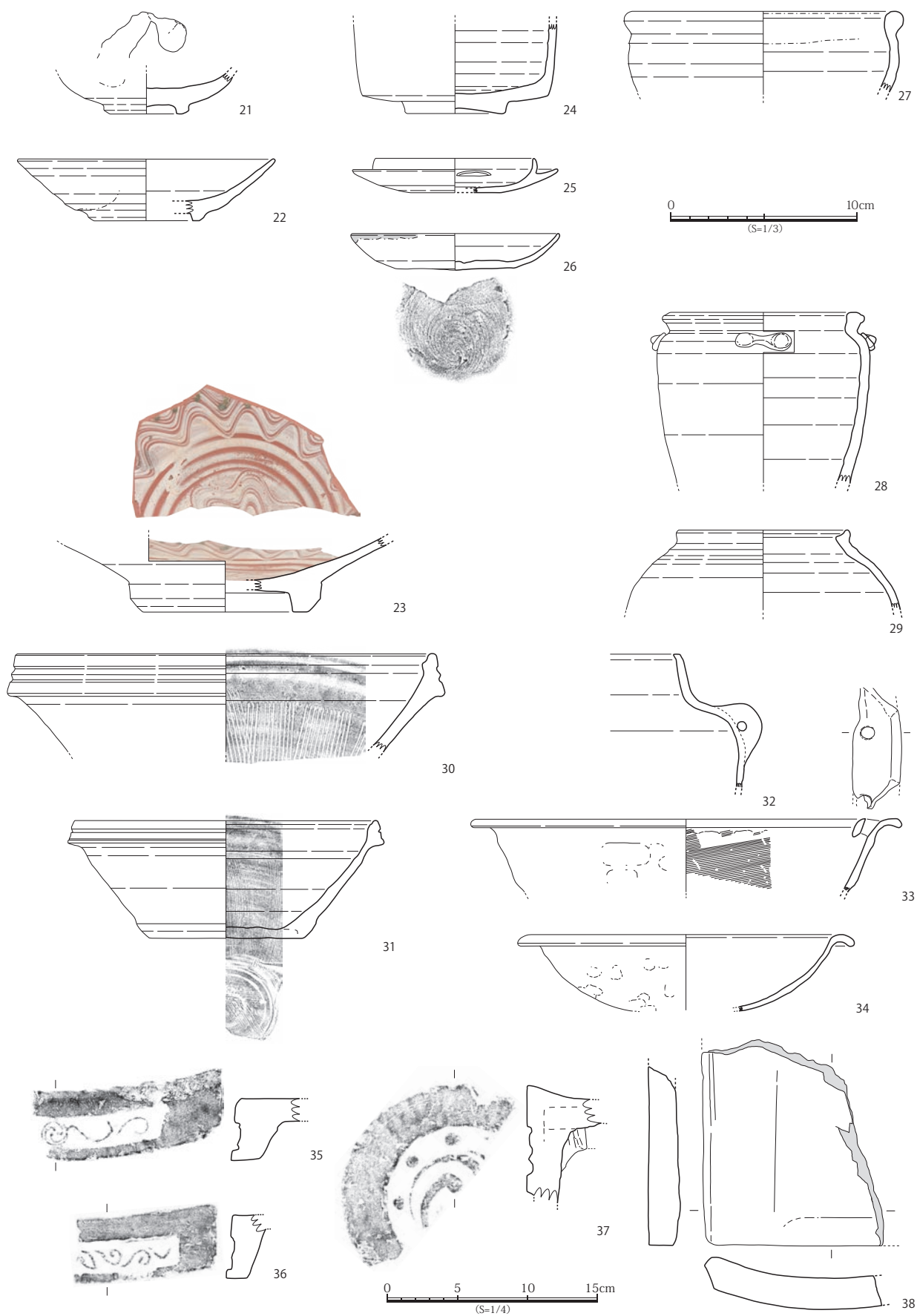
第7図 出土遺物実測図① (S=1/3)

第2表 出土遺物観察表（陶器・瓦質土器・土師質土器）（単位はcm [] は残存値）

番号	出土位置	種別	口径	最大径	器高	底径	特徴
14	裏込石下	施釉陶器 猪口	7.6		4.1	3.8	底面は回転糸切り。釉は灰釉、内外面に貫入あり。肥前系
15	裏込石下	陶胎染付 猪口	6.4		4.3	2.5	釉は灰釉、外面に水仙？ 肥前系
16	裏込内	陶器 碗	11.0		5.9	3.8	底部付近は露胎し、回転ヘラケズリ調整、底面見込みは兜巾。釉は灰釉。肥前系
17	裏込内	陶器 碗			[3.5]	6.6	内外面に灰釉。畳付きのみ露胎。肥前系
18	裏込内	陶器 皿			[2.6]	4.0	底部見込みから外面高台付近は回転ヘラケズリ、底面見込みは兜巾、高台断面が三角形。内面～外面上部まで施釉。肥前系
19	裏込内	陶器 皿			[1.3]	4.6	底部見込みから外面は回転ヘラケズリ、底面見込みは兜巾。内面見込みに渦巻状の回転ナデ、灰釉。
20	裏込内	陶器 皿	15.2		3.3	6.6	底部付近は露胎し回転ヘラケズリ調整。釉は灰釉。肥前系
21	裏込内	陶器 皿			[2.2]	3.9	底部見込みから外面は回転ヘラケズリ、底面見込みは兜巾。内面は藁灰釉、砂目積み。肥前系
22	裏込内	陶器 皿	13.8		3.3	5.6	内面から外面にかけて回転ロクロナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、高台端部を面取り。白化粧土が施され、内面見込みに砂目積み。肥前系
23	裏込内	陶器 片口鉢			[5.2]	11.8	内面は刷毛目による波状文。外面は回転ヘラケズリ調整、高台端部を面取り。肥前系
24	裏込内	陶器 火入			4.8	5.4	調整は回転ロクロナデ。高台を除く外面に灰釉を施釉
25	裏込内	陶器 灯明皿	8.4	11.0	1.85		外面底部は回転ヘラケズリ、他は回転ロクロナデ。かえり部にはヘラ状工具による穿孔
26	裏込内	土師質土器 皿	11.2		2.0	6.4	内外面回転ロクロナデ、底面は回転糸切底。口縁部にスス付着
27	裏込内	陶器 鉢	15.0		[4.3]		口縁内面から外面にかけて白土に透明釉を上掛け。
28	裏込内	陶器 壺	14.4	15.2	[12.2]		肩部に把手を貼り付け。内外面回転ロクロナデ
29	裏込石下	陶器 甕	12.4		[5.7]		内外面回転ロクロナデ
30	裏込内	陶器 播鉢	29.8	31.2	[7.0]		内面摺目 12 本 1 条。口縁外面に 2 条の沈線。回転ロクロナデ
31	裏込石下	陶器 播鉢	21.6	22.6	8.4	11.0	摺目 15 本 1 条。見込みの摺目は交差
32	裏込内	土師質土器 釜			[9.5]		内外面ヨコナデ、耳取付時ハケ目調整をナデ消し
33	裏込内	土師質土器 鍋	30.6		[5.2]		外面はユビオサエ、内面はハケメ。内耳の穿孔方向は上から下方向
34	裏込内	瓦質土器 鍋	24.0		[5.4]		外面はユビオサエ、内面は不定ナデ

第3表 出土遺物観察表（平瓦）（単位はcm [] は残存値）

番号	出土位置	瓦当										全長	顎部厚	平瓦厚	特徴
		上弧幅	下弧幅	上下幅	文様区		周縁部		脇区左	脇区右	周縁高				
					左右幅	上下幅	上部	下部							
35	裏込検出面	—	—	4.4	(9.6)	2.0	1.6	0.7	—	4.0	0.4	—	2.1	1.6	三ツ巴文＋均整唐草文（二転）。瓦当上面はケズリ、凸面はヨコナデ
36	裏込石下	—	—	4.5	(7.2)	2.1	1.6	0.65	—	2.6	0.3	—	1.5	1.05	二葉文？＋均整唐草文（三転）。凹面、凸面ともにヨコナデ
38	根石下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	[14.6]	—	2.2	凹面端部にヨコナデ
39	裏込内	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	[9.2]	—	2.0	凹面端部にヨコナデ。橙色に変色、表面に融着した砂粒
40	裏込内	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	[13.3]	—	1.9	凹面端部にヨコナデ。暗赤褐色に変色、表面に融着した砂粒



第8図 出土遺物実測図②
(21 ~ 26 : S=1/3 23 ~ 38 : S=1/4)

第4表 出土遺物観察表(丸瓦) (単位はcm [] は残存値)

番号	出土 位置	瓦当										全長	丸瓦 厚	特徴	
		直径	紋様区 径	内区		外区内縁			外区外縁		瓦当 厚				
						幅	珠紋		幅	高さ					
				径	巴巻		数（個）	径							高さ
37	裏込石下	[15.6]	[10.4]	[5.8]	右	1.5	（3）	1.2	0.2	3.0	0.3	2.4	—	2.0	三ツ巴紋、瓦当裏面移行部強いヨコナデ

第5表 出土遺物観察表(石製品) (単位はcm)

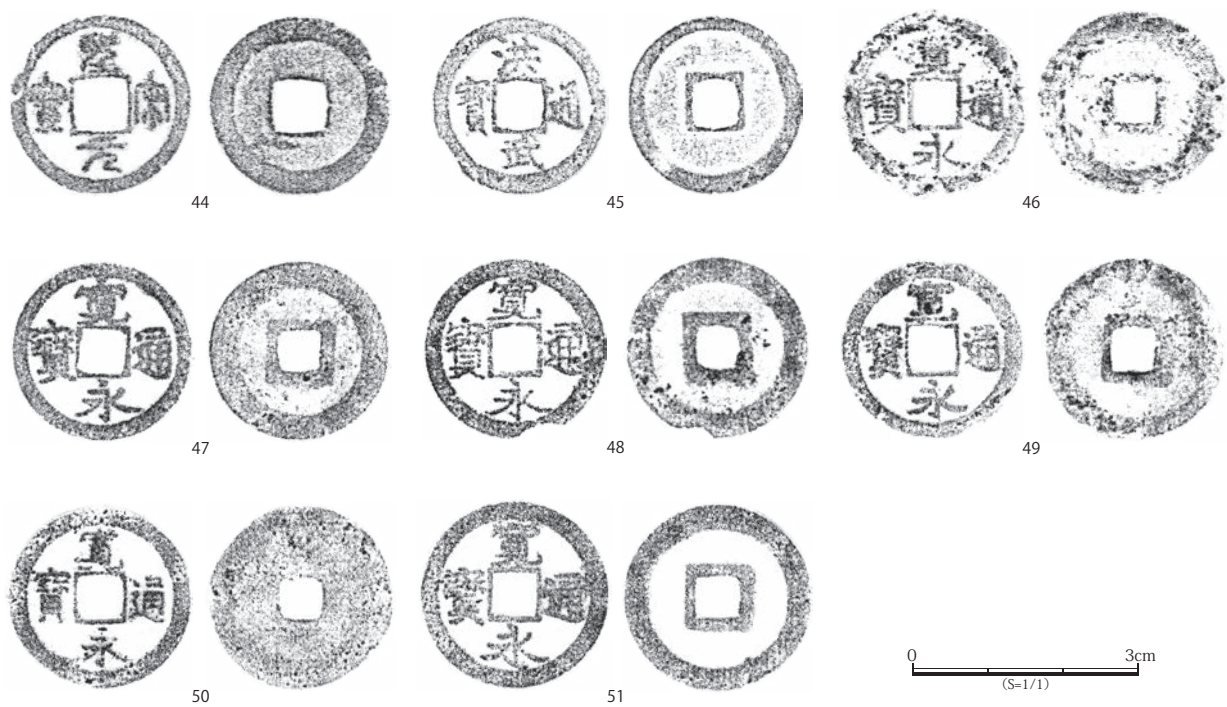
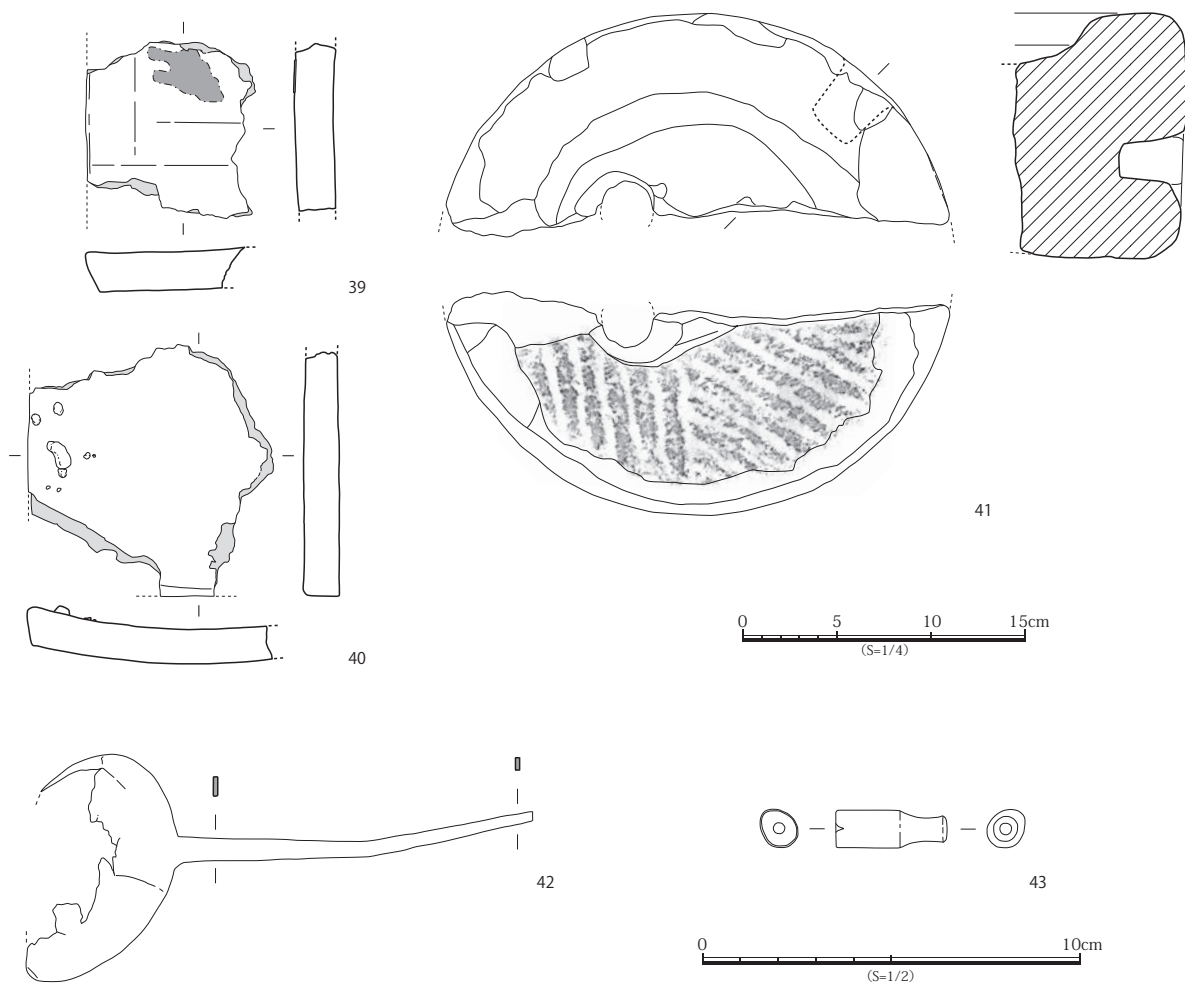
番号	出土位置	種別	推定全体幅	推定受皿幅	高さ	物配り穴径	挽手穴			備考
41	裏込内	石臼	27.6	19.0	13.0	2.6	幅 3.0	高さ 1.8 ~ 2.5	深さ 3.3	花崗岩

第6表 出土遺物観察表(金属製品) (単位はcm)

番号	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	備考		
42	濠内 黒褐色粘土	金銅製 匙	13.4	6.0 0.3 ~ 0.6 (柄部)	0.1	5.73g	スプーン状の凹みは潰れ、中央部が裂け、外側へ広がる		
43	濠内 黒褐色粘土	金銅製 煙管 吸口部	2.9	0.6 ~ 1.0	0.1	2.35g			
番号	出土位置	種別	縦	横	孔の径	厚さ	重さ	備考	
44	裏込攪乱	銅銭 「聖宋元寶」	2.36	2.48	0.7	0.1	2.0g		
45	裏込攪乱	銅銭 「洪武通寶」	2.35	2.32	0.6	0.15	2.59g		
46	濠内下層	銅銭 「寛永通寶」	2.52	2.54	0.55	0.17	2.59g	古寛永	
47	裏込周辺	銅銭 「寛永通寶」	2.39	2.40	0.55	0.14	2.89g	古寛永	
48	裏込石下	銅銭 「寛永通寶」	2.42	2.42	0.56	0.14	2.28g	古寛永	
49	裏込内	銅銭 「寛永通寶」	2.43	2.43	0.58	0.14	3.33g	古寛永	
50	裏込内	銅銭 「寛永通寶」	2.47	2.48	0.56	0.12	2.55g	新寛永 初鑄・寛文8年(1668)	
51	裏込内	銅銭 「寛永通寶」	2.51	2.51	0.55	0.13	2.89g	古寛永	

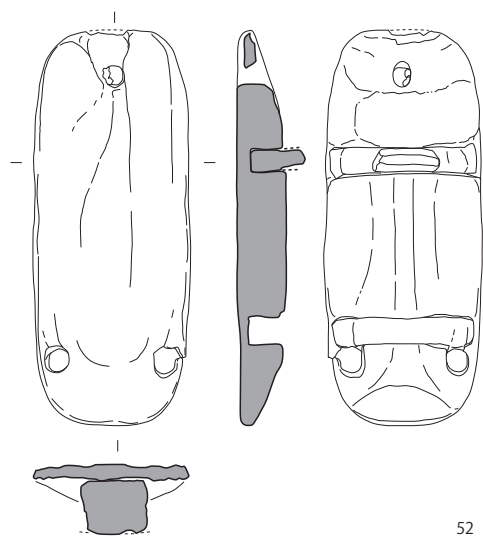
第7表 出土遺物観察表(木製品) (単位はcm)

番号	出土位置	種別	法量	特徴
52	堀内 暗灰色粘土	下駄	長さ 19.9 幅 5.4 厚さ 2.6	歯は前後それぞれ別造り。鼻緒を通す眼の径は 1.0 cm。表の凹みから右足用
53	堀内 暗灰色粘土	蓋	径 14.5 厚さ 0.8	上面に摘みをはめ込むための幅 0.7 cmの溝があり、固定するための釘穴もある。側面にケズリ痕あり。
54	堀内 暗灰色粘土	曲物	径 13.8 ~ 14.2 高さ 4.0 底板：縦 10.0 横 11.6 厚さ 0.55	側面には樹皮により接合。底板下面には焼印(横 3.5・縦 6.6)〔丸に「水」と「岡政」〕
55	堀内 暗灰色粘土	杓	長さ 17.4 幅 11.7 高さ 6.6	各板の厚さ 1 cm前後。長辺側面外面中央にわずかに焼印跡残存。底面と側面に竹釘の打ち直し跡あり。補修を重ね使用。
56	堀内	駒	径 3.5 厚さ 0.65	上面中央に径 0.3 cmの凹みあり。側面には稜あり。

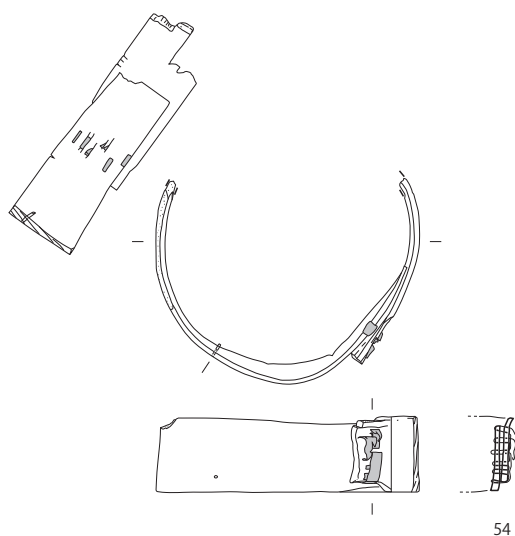


第9図 出土遺物実測図③

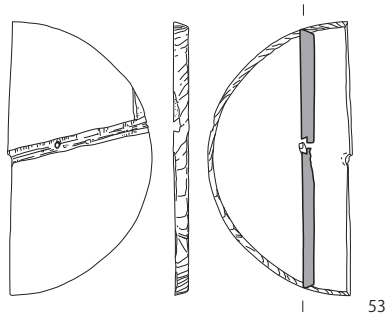
(39 ~ 40 S=1/4 42・43 S=1/2 44 ~ 51 S=1/1)



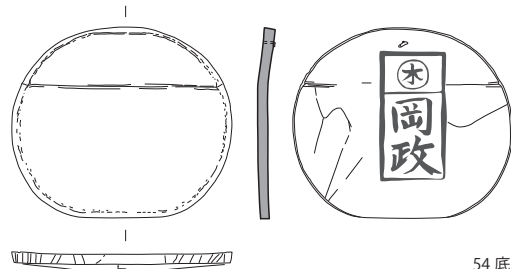
52



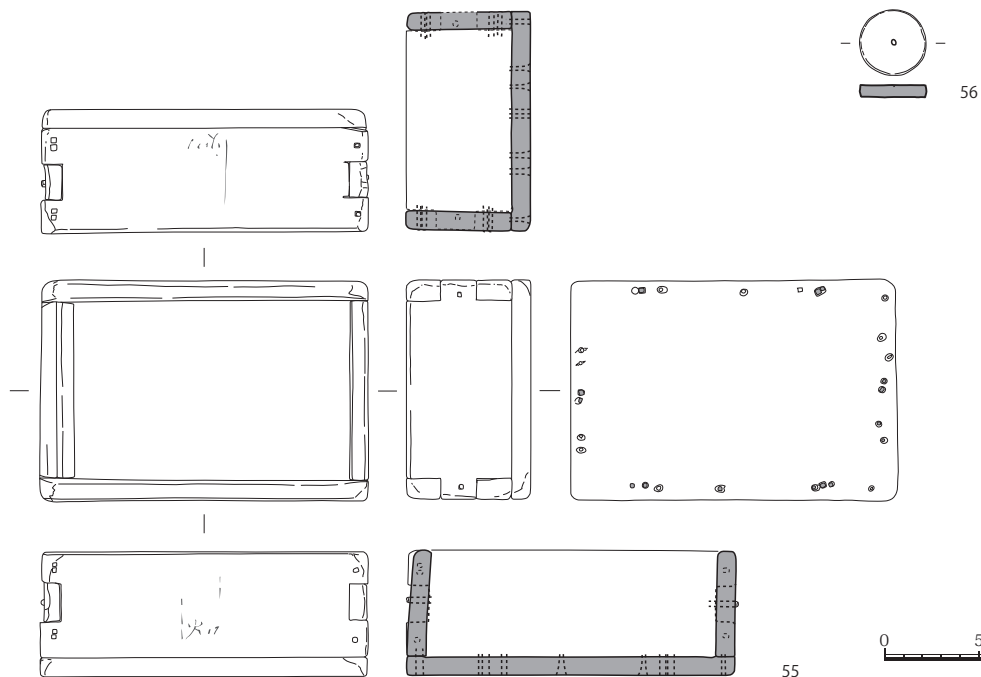
54



53



54底



56

55

0 5 10 15cm
(S=1/4)

第 10 図 出土遺物実測図④ (S=1/4)

IV まとめ

(1) 石垣の時期

「搦手の外堀」はこれまでの発掘調査成果と文献の検討により、本川（太田川）から京橋川へと抜ける自然流路（城北川）であったものを堰き止め、外堀として築造したのが福島期とされ、毛利期の広島城下の絵図「芸州広島城町割之図」と福島期の城郭を示す可能性の高い「広島絵図（元和五年御入国砌御城下絵図）」との比較から「搦手の外堀」の構築時期を福島期と解釈されているが、発掘調査では石垣裏込層から出土した遺物からは浅野期に相当しており、「搦手の外堀」の堀としての整備時期、その護岸施設としての石垣の構築時期を含めた「搦手の外堀」の築造工程を明確できるほどの資料が得られていないのが現状である。

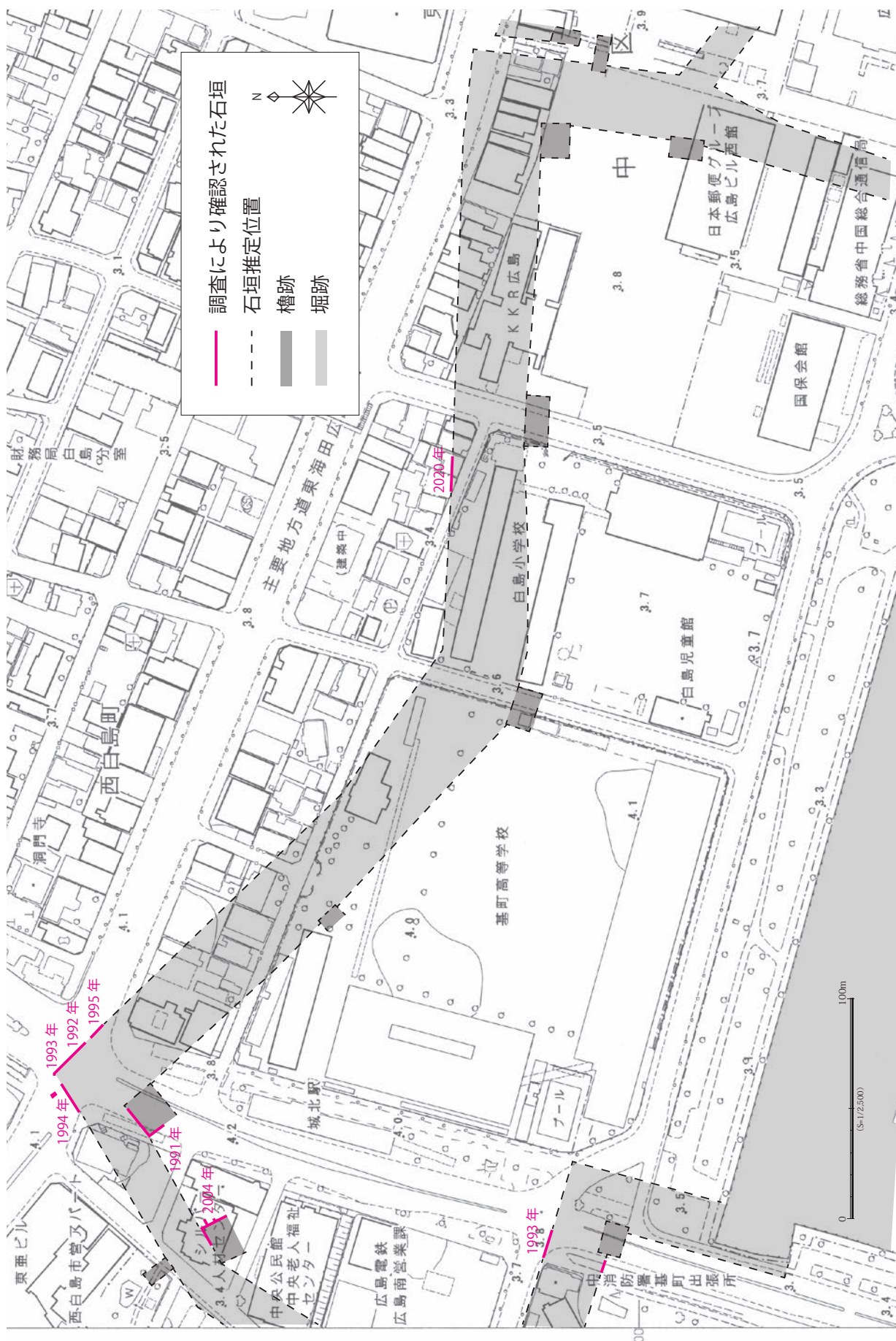
本調査区内で検出した石垣は根石を含め1段から2段と少ないながらも、約16mに渡って広い範囲で石垣の規模を確認することができた。石垣の裏込部分も良好に残存しており、栗石に混じり多くの遺物が出土した。初鋳年が寛文8年（1668）以降の寛永通寶（新寛永）があり、陶磁器の年代は攪乱による混入を考慮しても、17世紀中頃～18世紀中頃の時期が中心と考えられる。また、裏込内から被熱した遺物（第7図9、第9図39・40）が出土しており、石垣構築の際に火災後の廃棄物が混入したと考えられる。どの時期のものは断定できないが白島での火災の記録は、享保7年（1722）春、享保14年（1729）3月、宝暦12年（1762）7月がある。中でも享保14年の火災被害は甚大で、搦手の外堀の北側の侍町の大部分が延焼し、侍屋敷103軒、寺2軒、町屋46軒を焼失し、この火災の後に火災が城中に及ぶことを防ぐために城濠側の歩行多門の撤去し、後松原の侍屋敷の移転を行い、馬場兼避災地が設けられている。この火災後の対応を見ると外堀の手前まで火が及んでいたと十分推測される。

また、史料によると承応2年（1653）の洪水により「白島並方々堤」が決壊し、本調査区近隣と推定される井上権丞・井上権丞裏平櫓周辺の石垣が崩れた記録が残っている。広島城及び城下に及んだ甚大な被害は、幕府に修築願いを届け出て被災した同月より翌年8月まで修復普請が行われている。櫓などの城郭の主要施設のある外堀南側の石垣はこの時に修復されたと考えられる。侍町のある居住区である北側の石垣の再建に関しては、調査地点では洪水の被害を示すものは認められず、浅野期以前の石垣自体を確認することはできなかった。このため、石垣は洪水により福島期以前の石垣が根石から根こそぎ流出した後に再建された可能性と、新規に石垣を構築した2つの可能性が考えられる。

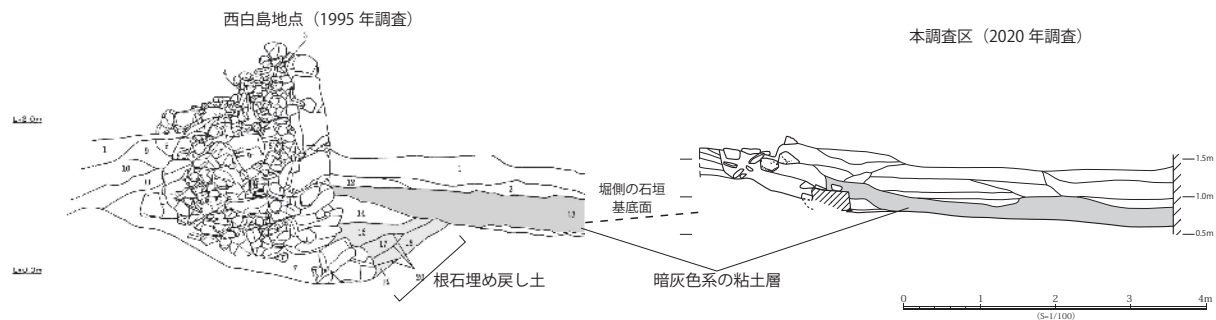
さらに絵図を見ると天明年間（1785）頃とされる広島城下絵図では外堀の北側は「畑」と記されており、明治の図面では宅地となっている。享保14年（1729）の火災を期に宅地から避災地（建物のない空閑地）を経て、再び宅地へと変遷したことが伺える。石垣裏込から出土した遺物等から石垣が構築された時期は、避災地から宅地へと整備された18世紀後半頃と推測される。

(2) 西白島地点の石垣との比較

本調査区の石垣は「搦手の外堀」の北側石垣にあたり、約300m西に位置する1995年の西白



第11図 北堀推定位置図 (S=1/2,500)



第 12 図 石垣土層断面比較図 (S=1/100)

島地点の石垣と続く。(第 11 図はこれまでの調査成果と明治期の測量図を合成) 太田川から引き込まれた水は搦手の北堀の北西から南東へ向かい流れていく。

両地点とも、箱島（白島）と呼ばれた島状地の南側縁辺部にあたる自然堆積層を根切りし、石垣を積み、裏込めに栗石を入れている。西白島地点では石垣の根石部分が堀底よりも約 80 cm 深く据えられている。これは西白島地点が太田川に近く、洪水などにより堀内へ流れ込む水量が多くなった場合、水流の影響を大きく受ける屈曲部分に近い位置であるため、洗掘^{せんくつ}を防止するためと考えられる。

両地点ともに、石垣付近の堀底面の高さはほぼ同じで、最下層の堆積量も大差ないことから堀内の水の流れは明治 45 年（1912）前後に埋め立てられる前は、ある程度安定したものであったと想定される。

（3）結語

今回の調査では、「搦手の外堀」の新たな地点で石垣を確認することができ、広島城の縄張りの一部を正確に把握する大きな成果を得られた。しかしながら、外堀の構築時期（自然河道から堀へ改修）、整備時期（石垣の積み直し）は本調査区内の事例だけでは断定できず、更なる事例が求められる。部分的ではあるがかつての広島城の姿が明らかになりつつあり、広島城の本来の姿やその変遷についてより具体的に解明するために更なる調査事例の増加が期待される。

参考・引用文献

- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 中井均 2016 『城館調査の手引き』 山川出版社
- 乗岡実 2002 「近世備前焼播鉢の編年案」 『岡山城三之曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』
- 広島市役所 1962 『新修広島市史』 第 5 巻
- 広島市立中央図書館編 1990 『広島城下町絵図集成』
- 「広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）」 広島市立中央図書館貴重資料アーカイブ (<https://trc-adeac.trc.co.jp/>)

圖 版

図版 1



a 調査区全景（航空写真・南から）



b 調査区全景（航空写真・北東から）



a 石垣（南東から）



b 堀埋土土層断面（南西から）

図版 3



a 石垣（西から）



b 石垣（東から）



c 石垣栗石除去後（西から）



d 石垣栗石除去後（東から）



a A 地点土層断面（西から）



b B 地点土層断面（西から）



c C 地点土層断面（西から）



d 裏込内石臼出土状況（北東から）



e 矢穴のある加工石材（北から）



f 曲物出土状況（東から）

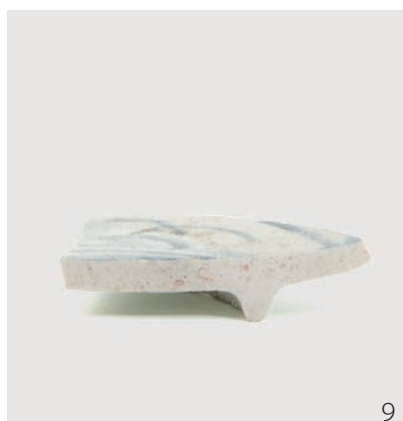


g 蓋出土状況（南東から）



h 枅出土状況（南西から）

図版 5





13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24

図版 7



25



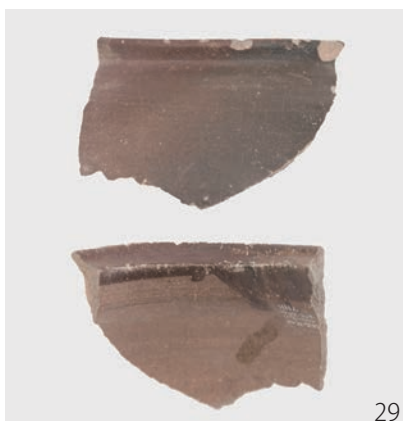
26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



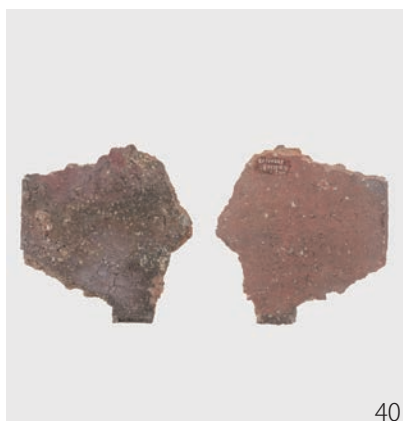
37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

図版 9



49



50



51



52



53



54



55



56



40

39

9

二次被熱を受けた遺物

出土遺物 (5)

報告書抄録

ふりがな	ひろしまじょうあと にしはくしま（2）ちてん							
書 名	広島城跡 西白島（Ⅱ）地点							
副 書 名								
シリーズ名	公益財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	若島一則 瀧岡大輔							
編集機関	公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課							
所 在 地	〒 732-0052 広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号							
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ひろしまじょうあと 広島城跡 にしはくしま 西白島 2 ちてん （Ⅱ）地点	広島県 広島市 中区 西白島町	34101	—	34° 24' 17"	132° 27' 44"	20200106 ～ 2020131	208 m ²	ビル建設工事に 伴う埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
広島城跡 西白島 （Ⅱ）地点	城郭	江戸時代	外堀・石垣		陶磁器・石臼・金 属製品・木製品			
要約								
明治時代以降に埋められた広島城北堀の石垣（東西長約 15.6 m）を江戸時代の絵図・明治の測量図と一致する位置で検出した。								

(公財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第9集

広島城跡西白島（Ⅱ）地点

—広島市中区西白島所在—

2021年3月

編集発行 公益財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL 082-568-6511

印刷 株式会社中本本店
〒730-0004 広島市中区東白島町13番15号
TEL 082-221-9181